

地名は文化財

明治二十二年の町村合併に伴う新地名を中心に

平成十七・六・三
渋川市立図書館

群馬県立女子大学文学部

北川 和秀

A、導入（伊参^{いさま}）

碓氷郡

飽馬安木末 石馬 坂本佐加毛土 磯部伊曾倍 石井伊波井 野後 駅家 浮囚

片岡郡

若田和加多 多胡 高渠太加無曾 佐没 長野奈加乃

甘楽郡

貫前奴木乃佐 酒甘 丹生 那非 端下 宗伎 端上 有只 那射 額部奴加倍

新屋尔比也 小野乎乃 拔鋒

多胡郡

山宗也末奈 織裳於利毛 辛科加良之奈 大家 武美 浮囚 八田

緑野郡

林原八也之波良 小野乎乃 升茂 高足 佐味 大前 尾張 保美 土師波尔之

浮囚 山高

那波郡

朝倉阿佐久良 鞘田佐也多 田後多之利 佐味 委文之士利 池田伊介多

葎束尔良都加

群馬郡

長野奈加乃 井出 小野乎乃 八木 上郊加無佐土 畔切安木利 島名之萬奈 群馬

桃井毛乃井 有馬安利萬 利刈止加利 駅家 白衣

吾妻郡

長田奈加太 伊参伊佐萬 大田於保太

利根郡

渭田奴末太 男信奈萬之奈 笠科加佐之奈 吳桃奈久留美

勢多郡

深田 田邑多無良 芳賀波加 桂萱加以加也 真壁萬加倍 深渠布加無曾

深沢布加佐波 時沢 藤沢布知佐波

佐伊郡

名橋奈波之 岸新 反治 佐井 淵名布知奈 駅家 雀部佐々伊倍 美侶

新田郡

新田 滓野加須乃 石西 祝人波布利 淡甘 駅家

山田郡

山田 大野於保乃 園田曾乃 真張萬波利

邑楽郡

池田伊岐太 疋太比木太 八田也太 長柄 (二十卷本『倭名類聚抄』巻七)

* 『倭名類聚抄』は平安時代前期に成立した一種の百科事典。醍醐天皇の皇女勤子内親王のために源順が編纂した。承平(九三二)〜九三八)年間に成立。

* 現在の吾妻郡中之条町は昭和三十年に一町三村(中之条町、名久田村、伊参村、沢田村)が合併して成立したもので、その四ヶ町村の一つが伊参村だった。今、「伊参」という地名は、「伊参幼稚園」「伊参簡易郵便局」「伊参スタジオ」などという形で残っており、読みは「いざま」。

昭和三十年に消滅した伊参村は、明治二十二年の町村合併の折に、原岩本・五反田・蟻川・大道新田という四ヶ村が合併して成立したもので、伊参という名は、そのあたりが古代の伊参郷に属していたという伝承によるという。

* 町村合併で新地名を決めるに際して、『和名抄』までさかのぼって古代地名を復活させようという姿勢は評価できる。ただ、地名の範囲が問題になる。古代の伊参郷の地域と近代の伊参村の範囲とはどの程度重なり合うものか。また、「いさま」という地名は何に由来するのか。同じ発音の地名は埼玉県秩父郡吉田町にもある。こちらは「石間」と書く。「いさ」は砂地、「ま」は狭間の意で、狭間(谷間)が砂地であったことに由来すると説かれている。吾妻郡の伊参郷の語源もこれと同じなのかどうかは分からないが、自然地形に由来する地名だとすれば、伊参郷のどこか(たぶん郷の中心的な場所)に「い



さま」と表現すべき地形があつたはずである。明治二十二年に成立した伊参村には、古代の伊参郷の名の由来になつたその場所が含まれるのかどうか。そんなことも本当は考えるべきことであつたらう。

* 『上野国郡村誌』（成立は明治一〇年代か）には、「上野国吾妻郡伊勢町」の条に、「伊参」という字があり、「伊参 本町ノ南ニアリ、東西五町南北二町三十八間」とある。

B、明治二十二年の新地名の由来（群馬県の場合）

明治二十年頃、日本国中には七万一千の町村があつた。これはほとんど江戸時代以来のものであり、近代日本にとつて、一つ一つの町村の面積はあまりにも狭すぎ、行政上不都合だつた。そこで、明治二十一年に市町村制が施行され、翌明治二十二年に大規模な町村合併を行い、全国の市町村の数は一万五千になつた。この大合併の折、江戸時代以来の村名は大部分が大字として残り、今に至つていゝる。都市部を除いて、今に残る大字の大部分は江戸時代まで遡れる貴重な地名である。

群馬県においては、明治二十年頃に約一千あつた町村が、明治二十二年の合併で二〇九に統合された。この二〇九の町村名の由来を分類する。

合併しなかつた町村……15（旧来の町村名のままが14、少し変更が1）

* 「少し変更」は、邑楽郡の北大島村が大島村と改称した例。

地名に冠した「上」「下」等を削除……4

* 碓氷郡の東上秋間・西上秋間・中秋間・下秋間の四ヶ村が合併して秋間村となつた例など。

城下町名・宿場名を採用……3

* 那波郡の福島・南玉・上飯島・上之手・角淵・下新田・上新田・与六分・齋田の九ヶ村が合併して玉村町になつた例。玉村はこの地にあつた江戸期の宿場名。

合併した町村のうちの一つの町村名等を採用……55

* この類が最多。吾妻郡の中之条町・伊勢町・西中之条村・青山村・市城村の五町村が合併して中之条町になつたが、新町名は五町村の中の中之条を採用。

西群馬郡の駒寄村は、大久保村と漆原村とが合併して成立したもので、新村名は村中央の大久保字駒寄をとつた。こういう例も含む。

合併した町村名を合成あるいは併称……26

* この類も多数を占める。「足して二で割る」方式。西群馬郡の中山村と尻高村とが合併して高山村になるが、これは尻高と中山の各一字をとつて合成したものの。

新田郡の本町・藪塚・山神・大久保・六千石・寄合の六ヶ村が合併してできた藪塚本町という町名は、藪塚と本町とを併称したものである。新幹線の駅名や高速道路のインターチェンジ名には、安中榛名、燕三条、渋川伊香保など、併称が見られるが、明治二十二年の群馬県内の新地名で併称と考えられるのは藪塚本町のみ。

合成地名の変種として、西群馬郡の清里村がある。これは、池端・野良犬・上青梨子・青梨子の四ヶ村が合併してできた村で、村名は、池端の池の字のさえずりと上青梨子・青梨子の青とを結合して清、野良犬の野の里偏をとつて清里と命名したもので、漢字の合成。

合併した村の数を示す……4

* 例えば、西群馬郡の六郷村。上小鳥・下小鳥・筑縄・上小嶋・下小嶋・上並榎の六ヶ村が合併してできたので、「六郷」と名づけられた。

自然地名を採用……20（川の名が12、山や丘陵の名が6、その他が2）

* 例えば、利根郡の七ヶ村が合併してできた白沢村。この村名は、地内を南北に貫流する白沢川に由来する。

南勢多郡の木瀬村は、村内を流れる桃木川と広瀬川との合成地名。地形による……6（川が4、その他が2）

* 例えば、山田郡の川内村。この村名は、合併した五ヶ村が渡良瀬川の内側に位置することに由来する。

郡名……2

古地名……26（うち古代郷名が12）

その地の施設名……10（うち神社が4）

郡内等における位置……3

由縁の氏族名……3

その地の故事等から……9（うち万葉歌関連が3）

その他……4

調査中……19

* 明治二十二年の町村合併に伴う新地名は、実に様々に工夫して命名されたものであつた。その多くは、全くの無から有を生み出すのではなく、既存の地名を使って作られたものである。また、失われた古地名の復活も目立つ。

C、さいたま市

先年、埼玉県の浦和市・大宮市・与野市が合併してさいたま市が生れた。この時の新市名は全国公募して、それを参考に決めたとのことで、その応募結果の上位一〇〇位までがさいたま市のホームページに掲載されている。その中の主なものを分類して示す。()内に示した数字は応募数の多い順の順位。

県名「埼玉」にちなむ……埼玉市(一位、717票)、さいたま市(二位、3821票)、彩玉市(四位、2588票)、さきたま市(七位、1374票)、新埼玉市(一位、彩珠市(二五位)、大埼玉市(五八位)など

旧三市名のいずれか……大宮市(三位、3008票)、浦和市(六位、1821票)、おみや市(三二位)、うらわ市(三四位)、新大宮市(五〇位)、新浦和市(六八位)など

三市名の合成……大和野市(八位、1331票)、浦野宮市(一一位)、和野宮市(一二位)、大浦野市(一六位)、宮野浦市(一八位)、大野浦市(二〇位)、宮和野市(四一位)など

「彩」の字を含む……彩都市(五位、2495票)、彩京市(九位、1025票)、彩市(一〇位、989票)、彩の国市(一五位)、彩央市(一七位)、彩国市(二一位)、彩の宮市(二二位)、彩光市(二八位)、彩野市(三〇位)、彩たま市(三五位)、彩宮市(三六位)、三彩市(四三位)など

「埼」の字を含む……埼京市(一三位)、埼都市(三一位)、埼央市(三三位) 未来・希望志向……新都市(二三位)、未来市(二四位)、あけぼの市(四五位)、平和市(五三位)、みらい市(六〇位)など

広域地名……武蔵市(二六位)、関東市(三七位)、むさし市(五七位)、武蔵野市(七五位)、北関東市(九九位)

* 埼玉県の県庁所在地が「さいたま市」というのは、分かりやすい命名ではある。ただ、「埼玉」というのは本来は武蔵国の郡名で、現在の行田市・羽生市・加須市・岩槻市・春日部市・越谷市・久喜市・八潮市・蓮田市などを中心とする地域であった。埼玉県という県名はこの郡名に由来する。一方、浦和市・大宮市・与野市は足立郡の地域であり、埼玉郡とは重ならない。「さいたま市」の誕生によって、「さいたま」の地が本来の場所から移動してしまったことになる。

狭い地域の名前が、その地を含む広い地域の名前になるということはよくあることで、典型的な例が「やまと」である。「やまと」は古くは今の天理市の一地域の郷名だった。それがやがて旧国名(今の奈良県)になり、さらに日本全体を

指す言葉になった。「群馬」という県名も上野国群馬郡に由来する。埼玉県の県庁所在地だから、その市を「さいたま市」と名づけるという命名法は、実は通常とは逆方向の命名であり、その結果として、「さいたま」と呼ばれる地が移動してしまうことになった。

そういう点に抵抗はあるが、といって「さいたま市」(表記の問題は別)以上にふさわしい名称も思い付かない。古地名を尊重するとすれば、郡名を採って足立市が考えられるが、広く支持を得られるとは思えない。現在の地名は文化財であるとともに、現代の人間生活の中に生きている。その兼ね合いが大切であろう。

D、「平成の大合併」に伴う新地名をめぐって

栃木県さくら市

栃木県の喜連川町と氏家町とが合併して「さくら市」になる。喜連川は中世、氏家は古代までさかのぼる地名である。二つの地名が由緒正しすぎて、どちらかを選ぶことができなかつたのかもしれない。新市名の理由は、単に桜並木や桜堤があるといったことらしい。

この新市名に関して、氏家町・喜連川町合併協議会のHPにQ&Aが載っている。

ひらがなの名称に関して

Q 一時期の流行で付けられたひらがなの名称は、後世に禍根を残す。

Q 一般名詞をひらがなのみとするのは、地域歴史への冒険になるのではないかと
思う。

Q ひらがなでは文字によるイメージも浮かばず、他地域との差別化が困難である。

Q 固有の漢字名称が望ましい。

Q 安易にさくら市と決定するのは、小学生が決定するのと一緒である。

Q 分かりやすく親しみやすいという理由で選ばれた今回の名称は、全国の笑いものになる。

A 日本の国花であり、固いイメージもあるため、春の到来にふさわしい華やかで明るく、しかも柔らかさを併せ持つ名称と考えています。

千葉県佐倉市との関係

Q 千葉県の佐倉市と混同され、混乱を招くと思う。

A 発音は同じでも意味が全く違う名称であり、現段階では千葉県の佐倉市から

も苦情は出ていない。

A 郵便等については郵便番号も書かれることから懸念は少ない。

歴史及び郷土愛

Q 歴史ある氏家町や喜連川町の名称を捨てるのは、先祖代々の住民をないがしろにすることとなる。

Q 対等合併の面子にこだわるあまり、両町の歴史に全く関係のない名称として
いる。

Q 両町の歴史を背負った由緒ある名称を捨てることは好ましくない。

Q 合併により新しい地名を作ることは歴史観をゆがめる。

Q 郷土に対する敬愛の念に欠ける。

A 両町には各々の歴史があり、代々その地に人々が生活し続け、地域文化を形成してきたところです。従って、両町に住む人々の多くは町名に愛着もあり、変えたくないという気持ちを持っていることと思われます。しかし、お互いに新市の名称は我が町の名前としたいと言い張っていたら、最大の目的である合併成就も危うくなりかねない状況も想定されます。学校名、地域名、施設名等に行き渡る限り両町名を残し、両町を築いてきた先人や町の歴史を軽視しないよう努めることで、ご理解いただきたいと考えています。

その他

Q さくらという名称から、氏家町・喜連川町がすぐに想定できるのか疑問である。

Q 桜は日本中どこにでもあり、この名称に決定することは井の中の蛙であり、愚の骨頂である。

Q 地元住民の総意というわがままであるような気がする。

Q 塩谷地区の一員ではなく、宇都宮の衛星都市として発展すべきであり、塩谷を連想する名称としなかったのは良い。

A 新市において、桜の苗木を植栽して名所を造成、さくら市の名称にふさわしいイメージづくりを展開し、さくら市の知名度を高めたいと考えています。

A 地域に住む多くの皆様の賛同を得て決定した名称であり、他地域へ迷惑がからぬ名称であれば何ら支障ないものと思われまます。

群馬県みどり市

笠懸、大間々、勢多東三町村法定合併協議会（会長・田村確也笠懸町長）の第
十一回会合が二十二日、大間々町役場で開かれ、新市の名称を「みどり市」と決
めた。

新市の名称は三町村の住民から公募し、小委員会が「みどり市」「あかがね市」の二案に候補を絞った。この日は、三町村の委員がそれぞれ別室で協議した結果、「みどり市」で意見が一致した。（平成一六・一二・二三 上毛新聞）

群馬県太田市新田町

来年三月の合併で発足する新太田市の町名で、新田町だけ新町名の前にすべて「新田」を付けることが正式に決まった。しかし、住所表記が最長十文字になったり、読みにくい地名もあり、合併する四市町の一部住民から「長く、紛らわしい」との声が上がっている。歴史的な背景のある「新田」の名を残したい新田町の熱い思いが今回の措置になったが、今後、論議を呼ぶ可能性もある。

新市の住所表記は先月の法定合併協議会の正副会長会議で決まり、合併期日の来年三月二十八日から使用される。新町名は現太田市がそのまま、尾島、新田、藪塚本三町は大字名から「大字」を削除した名称に町を付ける。新田町だけ新町名の前にすべて「新田」を冠するため、統一性を欠き分かりにくい表記も一部出てくるという。

町村名の継承は県内他地域の合併でも自治体間で対応が分かれるケースが出ているが、新田町で現在の「新田町大字市」は「太田市新田町」となり、「市」が二つ並ぶため地元以外の人には紛らわしい印象を与えそうだ。「新田町大字多村新田」は「太田市新田多村新田町」と新町名が七文字と長く、この中で「市・村・町」が混在する表記に。同様に複雑な名称はほかにもある。

新田町が「新田」にこだわる背景には歴史的な意義のほか、議論が白熱した新市の名称問題がある。四月の法定協で、同町は「新田市」を強く主張したが、投票の結果「太田市」に決定。「大字新田」が存在しない同町は、合併で「新田」の名称が消えてしまうため、新町名の在り方を検討した。

町役場などの公共施設が集積する金井地区に新たに「大字新田」を設けたり、一部地区に限って「新田」を付けることなどを考えたが、最終的にはすべてに付けることを決め、法定協に要望した。区長会への説明では、「『新田』を付けることはない」「長くなる」といった少数の異論もあったが、了承された。

法定協事務局は「町名は住民などの要望で変更も可能だが、合併時は決定通りの住所表記でスタートする」と説明している。

（平成一六・一一・二四 上毛新聞）